

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(38) 平成14年1月1日

藩校・寺子屋で使用された教科書(その3)

## 寺子屋と往来物・『庭訓往来』(K179/57)

往来物とは平安後期から明治初期まで広く使用された、初等教科書を総称した呼称で、往来とは、本来その名の通り手紙、特に往復書簡を意味していました。平安後期に、文筆に携わる公家が初等教科書として、往復書簡集の形式をとる書簡文例集を作ったのに始まり、鎌倉・室町時代を経て、書簡集形式をとらないものも現れ、内容・形式も多様になっていました。江戸時代には教育の普及に伴い、階層・地域に応じた種々の往来が作られ、往来物が初等教科書一般を意味するようになりました。往来物の最古のものは、11世紀に藤原明衡により作られた『明衡往来』であり、200余通の書簡を集め、正月から12月まで月を追って配列されています。

『庭訓往来』は、南北朝後期から室町時代初頭に作られた往来物で、玄慧(玄恵)の撰と伝えられています。鎌倉時代の『十二月往来』の形式を手本にし、正月から12月まで毎月の往復書状24通に、「八月十三日状」1通を加えた計25通の書状からなる、典型的な往来物の構成を採っています。内容は書状の書き方の模範文例集から、月毎に立てた主題に関する主要な語彙を列挙し、室町時代初期の武家社会に必要な知識の概要を示しています。月毎の主題は、正月の新年の諸行事、2月の和歌・連歌・詩・連句の会に始まり、11月の病気の種類とその治療法、12月の地方行政の制度と施行など、日常生活に密着した基礎知識が網羅されています。

玄慧(玄恵)(1269?~1350)は、鎌倉末期から南北朝期時代にかけて活躍した天台宗の僧侶で儒者でした。天台宗総本山である比叡山延暦寺で修学し、後には後醍醐天皇や側近の公卿たちにも古典を講じました。鎌倉幕府の崩壊後は、その学識を買われ足利尊氏・直義兄弟に仕えました。

ただ『庭訓往来』は玄慧の撰とされていますが、本文の記述など、玄慧没後の南北朝後期または室町初期から一般化された事象に関わる記事が採録されている点からも、現在では玄慧の撰説は否定されています。実際の撰者は未詳ですが、内容から推測して、貴族の教養についての記載が僅少で、資料の中に漢学を取り上げていない点などから、中層から上層の武家が僧侶であったらう言われています。

『庭訓往来』は広く地方武家の師弟の手本として使用され、武田信玄は享禄元(1528)年に8歳で手習・学問を修めましたが、本往来を学んだと伝えられています(『名将言行録』巻之七)。また中江藤樹は元和3(1617)年に、この往来を学び(『藤樹先生年譜』)、新井白石は寛文6(1666)年11歳の時、10日間で浄書したと言われています(『折り焚く柴の記』)。

江戸後期の寺子屋の全盛期には、刊本として庶民の家庭や寺子屋の教科書として普及し、多種多様に編集・出版されました。大きく分類すると、習字の手本としての「手習本」の系統、本文を構成する文字の読みの学習の為の「読本」系、語彙・語法の説明や由来等を引用した研究書である「注釈本」系、庶民の児童のための挿絵入りの「絵入本」系の4分類でした。『庭訓往来』は、その時代や社会の必要に応じて形や内容を変え、身分階級や都市・農山漁村などの地域を越え全国に普及していきました。特に簡潔平易な挿絵と注解を付した、絵入り本は広く流布しました。

当館所蔵の『庭訓往来諺解大成』(K179/77)(永井如瓶撰、文化12(1815)年大阪心斎橋の文金堂から刊行:全4冊)は、『庭訓往来』の代表的な注釈本で優れた研究書です。江戸期の有数の考証史家であった如瓶は、今までの『庭訓往来』注釈本の内容に批判検討を加え、原典を再考し本文の原義を客観的に解説しました。

### 【参考文献】

『庭訓往来 句双紙』新日本古典文学大系 52(918/113)

『庭訓往来』東洋文庫(082/112)

『日本教科書大系』(375.9/118)

当館所蔵『校正新板 庭訓往来』(K179/57)

「春の始めの御悦、貴方に向かって先づ祝い申し候ひ～」

(正月五日 左衛門尉藤原 謹上硯守殿)の箇所